

乳房

宮本百合子

青空文庫

何か物音がする……何か音がしている……目ざめかけた意識をそこへ力の限りすが縋りかけて、ひろ子はくたびれた深い眠りの底から段々苦しく浮きあがって来た。

真暗闇の中に目をあけたが頭のうしろが痺しびれたようで、仰向きに寝た枕ごと体が急にグルリと一廻転したような気がした。寝馴れた自分の部屋の中なのに、ひろ子は自分の頭がどっちを向いているか、突とつき嗟にはつきりしなかった。

眼をあけたまま耳を澄していると、音がしたのは夢ではなかった。時々猫がトタンのひきし庇の上を歩いて大きい音を立てることがある、それとも違う、低い力のこもった物音が階下の台所のあたりでしている。

ひろ子は音を立てず布団を撥はねのけ、裾の方にかけてある羽織へ手をとおしながら立ち上った。染そめがすり紺紺の夜着の袖が重なるぐらいのところ、もう一人の同僚の保母タミノが寝ている。足さぐりで部屋の外へ出ようとして、ひろ子は思わずよろけた。

「なに？……あかりつけようか？」

タミノは半醒の若々しい眠さで舌の纏もつれるような声である。

「……待つて……」

泥棒とも思えなかつたが、ひろ子の気はゆるまなかつた。九月に市電の争議がはじまつてから、この託児所も応援に参加し、古参の沢崎キンがつれて行かれてからは時ならぬ時に私服が来た。何だ、返事がないから、空巢かと思つたよなどと、ぬけぬけ上り込まれてはかなわぬ。ひろ子にはまた別の不安もあつた。家賃滞納で家主との間に悶着が起つていた。御嶽山お百草。そういう看板の横へ近頃新しく忠誠会第二支部という看板を下げた藤井は、こまかい家作をこの辺に持つていて、滞納のとれる見込みなしと見ると、ごろつきを雇つて殴りこみをさせるので評判であつた。脅おどしでなく、本当に畳をはいで、借家人をたたき出した。

四五日前にもその藤井がここへやつて来た。藤井は角刈の素頭で、まがいもののラッコの衿をつけたインバネスの片袖を肩へはねあげ、糸目のたつた襦しゆす子足袋の足を片組みにして、

「女ばつかりだつて、そうそうつけ上つて貰つちやこつちの口が干上るからね。——の出来ないというんなら、のけるようにしてのかす。洋服なんぞ着た女に、ろくなのはありや

しねえ」

いかつい口を利きながら、眼は好色らしく光らせた。スカートと柔かいジャケットの上から割烹着かつぽうぎをつけ、そこに膝ひざついているひろ子の体や、あち向で何かしているタミノの無頓着な後つきをじろり、じろり眺めて、ねばって行った。いやがらせでも始めたか。畜生！ という気もあつて、ひろ子は六畳の小窓を急に荒つぽくあけて外を見おろした。

夜露に濡れたトタンが月に照らされている、平らに沈んだその光のひろがり、ひろ子の目をとらえた。見えないところで既に高く高くのぼっている月の隈くまない光は、夜霧にこめられたむこうの原ツばの先まで水つぽく細かく燦きらめかせ、その煙のような軽い遠景をつい目の先に灑よじませて、こわれた竹垣の端に歪よこんで立っている街燈が、その下に転ころがっている太い土管をボンヤリと照し出している。夜霧にとけまじった月光と、赤黄く濁った電燈の色とは、そこで陰気な影を錯雑さくさくさせている。

貧しく棟の低い界隈の夜は寝しずまつている。ひろ子はそのまま雨戸をしめようとしたら、こつちの庇の下からいそいで男が姿を現した。足より先にまず顔をと云いたげに体を斜はすつかいに運んで二階の窓を振仰あぎながら、手をふった。細面の顔半面と着流しの肩に深夜の月は寒そうで、ひろ子は窓の奥から眼を見はったが、

「なアんだ！」

お前さんだったのかという声を出した。それを合図に待っていたらしく、寢床に起き上っていたタミノが手をのぼして、電燈をひねった。俄にわかの明りで、タミノは眠たい丸顔を一層くしやくしやさせた。

「大谷さん？——何サ今ごろんなつて」

寢間着の前をはだけ、むっちりしたつやのいい膝小僧を出したまんま腹立たしそうに呟いた。

「用事だったらまた起すから寝てなさい、よ、風邪ひくわ」

片隅によせあつめものの古くさいテーブルなどが置いてある三畳の方から、急な階子段がむき出しに下の六畳へついている。ひろ子は暗がりの中を手さぐりでその十燭をつけ、間じきりの唐紙はずしてある四畳半をぬけ、流しの前へ下りた。節約で、台所の灯はつけてない。水口の雨戸の建てつけが腐つているところをコトコトやっていると、外から少しじれつたそうに、

「——どれ」

と戸をひくようにした。

「駄目、駄目。こっちを先へもち上げなけりや」

戸があくと同時に一またぎで大谷が土間に入った。

「なるほどこれじゃ骨が折れる。却って用心がいいようなもんだね」

そして、持ち前の毒のない調子で目をしばたたきながらふ、ふ、ふ、と笑った。

「どうしたの、今時分」

「急に頼みが出来たんだがね」

「何だか音がしたと思つて見てるのに、すぐ顔を出さないんだもの」

「失敬、失敬」

大谷は首をすくめるような恰好をして笑いながら、

「しょんべんしてたんだ」

低い声で云つて舌を出した。

大谷の用事は、ここから明朝誰か柳島の組会へ出てくれというのであった。強制調停に不服なところへ馘かくしゆ首公表で、各車庫は再び動揺はじめていたのであった。

「八時に、山岸つて、支部長ですがね、その男を訪ねて事務所の方へ行けばいいことにな

つているんだ。突然ですまないけれど——頼む、ね！」

ひろ子は、髪を編下げにし、自分に合わせては派手な貫いものの銘仙羽織を着て揚板のところにしゃがんでいるのであったが、

「——困ったナ」

とバットに火をつけている大谷を見上げた。

「——亀戸の方から誰かないかしら。こつちは飯田さんが広尾へ出るんです」

「あつちは白井君にきいて貰ったんだ。錦糸堀があるんだそうだ」

「——あのひと……ききに行ったのかしら……」

妙な工合にやつきながら、大谷を見つめるひろ子の視線をまともに受け、大谷は煙草を深く吸いこみながら何か前後の事情を考え合わせる風であったが、

「いや、行つてるだろう。……行つてるよ」

確信のある言勢で云った。

白井時雄については、当人の口から元九州辺で運動に関係していたことがあると云われているばかりで、誰も確実な身元や経歴を知らなかった。いつの間にか診療所へ出入しはじめ、組合の活動に人手が足りなくなつて来たら、これもまたいつの間にか、書記局の手

伝いのようになつた。二十四五の、後姿を見ると肩の落ちたような感じの小柄な男であつた。

ひろ子は、あんまり人嫌いしない性質であつたが、この白井がニュースなど持つて来て、喋るでもなく、子供らと遊ぶでもなく、その辺を愚図愚図して自分たちの立居振舞を見ていられると、背中がむずついて来るような居心地わるさを感じた。いつになつても本能的に馴染むことなじの出来ないところがあつて、ひろ子に一種の苦しい気分を起させるのであつた。白井の云うことにはちぐはぐなこともあつた。

或る席で、ひろ子が白井に対してもつてゐる否定的な印象を述べた時も、大谷は例によつて目を盛にしばたたき、口を尖らすようにして、あぐらをかいた膝の前でバットの空箱を細かく裂きながら注意ぶかく傾聴はしたが、決定的な意見は云わなかつた。最後に頭を上げ、

「——調査する必要はあるね」

と云つた。市電のことが起つてから、大谷は応援活動の方面での責任者となり、忙しさにまぎれて調査もおそらくそのままなのだろう。白井のことを云うひろ子と大谷との心持の間には、それだけのたたまつて来ているものがあるのであつた。

大谷は、土間に落した吸い殻を穿き減らした下駄のうしろで踏み消しながら、

「——じゃ頼みました、八時に、山岸、ね」

「……………」

ひろ子は、片腕を高く頭の上へまわして、左手でその手の先を引ばるような困惑の表情をした。

「子供のものもらいのことがあるし——、弱ったわ、本当に」

「ん——。ひろ前ですむよ。それからだっていいだろう？　もし何なら夜だっていいさ、診療所はどうせ十時までだもの」

ひろ子は、そういうやりかたでなく、もつと親たちの心持にも響いてゆくように、託児所の手不足からひろがったものもらいの始末をしたのであった。夕方、迎えに立ちよるおつかさんの顔を見るなり、

「おつかちゃん！　六坊、きょう先生とこへ行つたよ、目洗つたんだよ！　ちつとも痛くなんかないや！」

ぴんつくしながら子供の口からきかされれば、同じことながら母親たちが感じるあたたかみはどんなに違うだろう。

沢崎がつかまえられるからばかりでなく、特に今そういう心くばりは母親たちの託児所に対する気持の傾きに対しても大切だ。ひろ子にはその必要が見えていた。大谷がいそがしい活動の間で、そこへ迄気がつかないのは無理ないし、大体、今度の応援につれて託児所として起つて来ている毎日の様々の困難は、個人的な立話で解決されることでもないのであった。

「じゃ、とにかく何とかしますから」

ひろ子は、やがて両手を膝に突はるようにしてゆっくり立ち上りながら云った。

「——今頃ふらふらして、あなた、大丈夫かしら」

「マアいいだろう、第三日曜だから。——じゃ失敬。折角寝たところを起してすみませんでした」

元氣よく外へ出かけて、大谷は、

「ホウ」

敷居をまたぎかけたなり、ひろ子の方へ首を廻らして、

「もうこんだよ」

フーと夜気に向つて白く息を吐いて見せた。夜霧に溶けた月光は、さつきより一層静か

に濃く、寒さをまして重たそうに見えた。そこを劈つんざいて一筋サツとこちらからの電燈の光が走っている。ひろ子は雨戸に手をかけた姿で、身ぶるいした。

「——重吉さんから手紙来るか？」

「もう二週間ばかり来ないわ——どうしたのかしら」

「戦争からこつちまたなかの条件がわるくなつたんだな。——会つたらよろしく云つて下さい」

「ええ。ありがとう」

ひろ子はつよく合点した。そして、良人の深川重吉の古い親友であり、現在の彼女にとつては指導的な立場にいる大谷の夏かつかつ々と鳴る下駄の音が、溝板を渡るのをきき澄してから、戸締りをして、二階へ戻つた。

二

横丁を曲ると、羽目に寄せて、ズラリと自転車が並んでいるのが目についた。夫それぞれ々うしろに一寸した包をくくりつけたままで、斜かいに頭を揃えて置いてあるのだが、その一

台には、つつじの小鉢が古い真田紐さなだひもで念入りからあげつけてあった。

青葱あおねぎの葉などが落ちている朝の往來をそつちに向つて近づきながら、ひろ子は或る言葉を思い出した。その国の労働者の生活状態はその国の労働人口に比例して何台自転車をもっているかということに分る、多分そんな文句であった。今日の前に市電の連中の自転車は二十台以上も並んではいたが、スポークがキラキラしているような新しいのは唯の一台もなかった。

ガラス戸が四枚たつ入口のところへ、三々五々黙りがちに従業員がやって来ていた。入口のすぐ手前のところで立ち停つてバットの最後の一ふかしを唇やけどを火傷しそうな手つきで吸つて、自棄やけにその殻を地べたへたたきつけてから入るのがある。どつかりと上りがまち框がまちに外套の裾をひろげて腰をおろし高く片脚ずつ持ち上げて、いそぎもせず靴の紐を解いているのがある。

ひろ子は足許の靴をよけて爪立つようにしながら、

「あの、山岸さん見えていましうか」

上り端の長四畳のテーブルにかたまっている連中に声をかけた。黒い外套の背中を見せてあちら向に肱を突いていたのが、向きかえり、土間に立っているひろ子を見た。

「——オーイ、支部長いるかア」

声だけ階段口に向って張り上げた。

「おう」

「用のひとだ」

踵に重みをかけド、ド、ドと響を立てて誰かが降りて来かけた。折から、ゆっくり登って行った三四人と窮屈そうに中段で身を躲かわし、のこりの三四段をまたド、ド、ドと小肥りの、髪をポマードで分けた外套なしの詰襟が現われた。

「やア」

如才ない物ごしで声をかけてひろ子に近づいた。ひろ子は、大谷にきいて来たと言った。

「やア、それはどうも御苦労さんです、上って下さい」

ひろ子が靴をぬいでいる間、山岸はそのうしろに立って両手をズボンのポケットに突っこんだまま、

「大谷君、今日は見えんですか」

と言った。

「私ひとりなんですけれど……」

「いや、却って御婦人の方が効果的でいいです。ハツハツハ」
階子口に行きかかると、山岸が何気なく、

「じゃア……」

片手で顎を撫で、通路からはずれて立ち止った。

「どういう順序にしますかな」

ひろ子は講演にでも出る前のような妙な気持がした。

「御都合で、私は別にどうって——」

「じゃ——一つ先へやって貰いますか」

早口に云って山岸自身先に立ち二階へ登って行った。

大小三間がぶっこぬかれていた。正面の長押なげしから墨黒々とビラが下っている。「百三十名鹹首絶対反対！」「バス乗換券発行反対！ 応援車掌要求」強制調停後のと並んで「百二十一万三千二百七十円、人件費削減絶対反対！」というのも下っている。

すつかり開け放された左手の腰高窓から朝日がさし込んでいた。まだ暖みの少い早朝の澄んだ光線を背中にうけてその窓框に数人押し並び、その中の一人が靴下の中で頻しきりに拇お指やゆびを動かしながら何か説明している。ひろ子の坐ったところから其等の人々の姿は逆光

線で、黒つぼく見えるうしろに、広く雲のない空が拡がり、隣のスレート屋根の上で、四つずつ二列に並んだ通風筒の頭が、同じ方向に、同じ速さで、クルクル、クルクル廻っているのが見える。

隅つこに、どういう訳か二脚だけある椅子へこつち向に跨り、粗末な曲木のよりかかりに両腕をもたせて一人は顎をのせ、一人は片膝でひどく貧乏ゆすりをしている。畳の上では立てた両方の膝を抱えこんだ上に突伏しているもの。あぐらをかいた両股の間へさし交しに手を入れ体をゆすぶっている者。――

ひろ子は、あたりの雰囲気の裡に複雑なものを感じた。会合に馴れ切った、一通りのことでは驚きもせぬと云いたげなその室内の空気の底に、実は方向のきまっていない或る動揺、口に出して云い切るまでにはなっていない予期というようなものが流れているのが感じられる。それは、椅子に跨って貧乏ゆすりしている三十がらみの従業員の落付かなく人の出入りに注がれる眼くぼりの中にも認めることが出来るのであった。

やがて、正面の小机のところへ、喉に湿布を捲きつけた一人の背の高い従業員が来た。その男は立ったなり自分の腕時計を見、ネジをまき、さつきからその机へ頬杖をつけてぼんやりあぐらをかいていた中年の従業員と何か話した。

「じゃあ、始めますからア」

椅子に跨つていた一人の方は下りて畳へあぐらをくみ、一人はそのままいた。

「お、しめなよ、寒いや」

窓際のが外套の襟を立てた。

「じゃあこれから第五組組会を開きます」

じじむさく喉に湿布を捲いたのが組長であるらしく、司会をした。

「一昨二十六日午後、川野委員長対大石、佐藤との会見においては、百二十七名に対する不当なる鹹首に対する我々の側からの強硬なる抗議に拘らず、あつさり蹴られた顛てんまつ末は、即刻掲示したとおりであります。今日は、その後の経過について報告し、我々第五組としての態度を決したいと思いますが、その前に、今ここへ、労救が人をよこしているから、その方からやって行きたいと思ひます」

すると、ひろ子が坐っているすぐわきにあぐらをかいていた一見世帯持の四十がらみの従業員が、誇張した大声で、

「異議なし！」

と下を向いたまま首をふつて叫んだ。

「……じゃ、どうぞ」

ひろ子はその場で居ずまいを直し、口を切ろうとしたら、

「こつちへ出て下さい」

議長が自分のわきを示した。ひろ子がほんのり上気した顔でそつちへ立って行くと、更に、

「異議なアし！」

と後の方で頓狂に叫んだ者がある。笑声が起った。

それにかかずらわらないことで全体の空気をひきしめつつ、ひろ子は飾りけのない、はっきりした口調で、今度の争議が一般の労働者の神さんたちにまで、どのくらい関心をひき起しているかということ、鍾しやうき 馮たけ タビへ出ている秀子のおふくろの言葉などを実例にひいて話した。そして、今朝、既に広尾では家族会を応援して移動託児所をひらいていることを説明した。

「きのう、慶大裏で飛びこみ自殺をした大江さんはほんとお気の毒だったと思います。新聞は日頃呑んだくれだったと書きましたけれど、広尾の人からじかにきいた話はちがいます。大江さんのお神さんが病身だものでどうしても欠勤が多く、それを首キリの口実に

されたからああいうことになったんだそうです。私たちがもつと強くて、病院でも持つていたら、大江さんは病身のおかみさんのためにクビにはならずすんだのと思います。自殺しなくてもよかつたと思うと、残念です」

「異議なし！」

「そうだ！」

つよい拍手が起つた。ひろ子は自分ではまるで気づかない集注した美しい表情で顔を燃し、

「どうぞ、皆さん、がんばって下さい」

と云つた。

「私たちは及ばずながら出来るだけのおてつだいの準備をしています。それが無にならないように、どうぞしつかりやって下さい！」

さつきのような彌次気分のない、誠意ある拍手が長く響いた。

「——では続いて報告にうつります」

皆に要求されて、支部長の山岸が片手をズボンのポケットに入れた演説口調で、

「不肖私は、この際支部長の責を諸君と共に荷になっております以上は、あくまで闘争の第一線に殫たおれる決意をもつ者であることを声明します。ついては、即刻闘争の具体的方法について忌憚きたんない大衆的討論にうつりたいと思います」

そう云ったところから、場内は目に見えて緊張して来た。

「支部長の提案に、質問意見があつたら出して下さい」

「……………」

「議長！」

この時、ひろ子の坐っている壁ぎわの場所からは斜向いに当るところで、一人の若い従業員が肱を突きのような工合に手を挙げた。

「第三班の決議を発表したいと思います」

「やっして下さい」

「われわれ第三班は、今朝改めて班会を持ち、要求は当然拒絶されるであろうという見とおしに立って、即刻ストを決議し、闘争委員を選出しました」

「……………」

微妙なざわめきが場内にひろがりはじめた。百二十七名の鹹首反対を絶対に妥協しない

こと。要求がきかれなければストライキ準備に入れという指令は本部から既に数日前発せられているのだ。山岸は力をつよい小波のように動きはじめた雰囲気**を強いて無視し、わざとらしく燻たそうに眉根を顰めて丸っこい手ですったマツチから煙草に火をつけている。**

「ちよいと……そのウ、質問なんだが——」

不決断に引っぱって、のろくさと一つの声が沈黙を破った。

「その第三班の決議つてのは——どういふんかね。俺にやちよいと分らないんだが——全線立たなくても、ここだけで行こうつてのかね」

「第三班ではその気なんだ」

若い従業員は短く答えて口を噤んだ。

「それなら」

のろのろものを云っていたその男は俄に居直ったように挑発的な声を高め、

「俺あ、絶対に、その案には反対だ！」

ひろ子はその声が、さつき自分が立ってゆくとき後の方から「異議なし」と彌次つた声であるのをききわけた。

「異議なし！」

別の声が続いた。

「俺も反対だ！　ここつきりなんぞでやって見ろ。馬鹿馬鹿しい。根こそぎやられて、それこそ玉なしだア」

ひろ子は全身の注意をよびさまされた。異議をとなえているものたちの間には妙に腹の合った空気がある。

「議長！」

「議長ッ！」

二つの声が同時に競り合^せって起り、甲高い方が一方を強引に押し切って、

「そりゃ違うと思うんだ」
と強く抗議した。

「二月の広尾のストのことを考えて見たって分ると思うんだ。部分的ストは可能だし、それがきっかけで全線立つ情勢は現実にもう熟しているんだ。そんなことは誰だって実際現場の様子を知っているもんには分ってるはずだと思う。さもなけりや、本部はどうしてあ
あいう指令を出したんだ？」

「議長！」

万年筆だのエヴァシャープだのを胸ポケットにさしている年配のが、落着いたような声で云った。

「俺は第一班だが……これは個人的意見なんだが、ストをやることに俺は絶対、賛成だ！」
一言一言に重みをつけてそう云っておいて、

「但し、だ」

一転して巧に全員の注意を自分にあつめた。

「但し、全線が一齐に立たないならば、ストをやることは、俺は絶対に反対だ！」

ひろ子は胸の中を熱いものが逆流したように感じて唇をかんだ。何とこの幹部連中は狡猾に心理のめりはりをつかまえて、切り崩しをしているのだろう。自分がこの会合で発言権のないお客にすぎないことをひろ子は苦痛に感じた。炭がおこって火になるときだつて、どこかの一点からついて全体へうつつてゆくのではないか。それだのに――。

言葉使いの意味ありげなあやに煽^{あお}られて、パチ、パチ手をたたいたものがあつた。

「力関係を考えないで、何でもストをやろうなんて、それこそ小児病だ。今、ここだけでなんてやれるかい！」

「議長！」

再び甲高い声が主張した。

「力関係って云ったって、相対的なもんだぜ、放つたらかして、こっちから押さないでいても有利になつて来る力関係なんて、資本主義の社会にあるもんか。現に強制調停までだつて、一ふんばりふんばればやれたんだ。それを、天下り委員会にまかして、謂わば、いなされたんじゃないか」

「そうだ！」

「異議ナシ！」

「今度だつて、本部がこつそりクビキリ候補の名簿をこさえて、さし上げたんだつていう話さえあるじゃないか」

「チエツ！」

大会の前後に、各車庫から「傾向的」な従業員が六十人以上警察へ引っぱられ、労救員もその中に何人かまじっていた。あらかじめ、そうしてしっかりした分子を引きぬいてしまった経営者側の意図が、こういういざという場合になつて見ると、まざまざ分るのである。ひろ子は益々くちおしく思った。

全線ストか、さもなければ全然ストには立たない、立つても意味ないという敗北的な考

えかたを、指令や方針の解釈に当って争議のはじまりっから、東交幹部の大部分が盛に従業員の心にふきこんで来ていた。情勢がこみ入ると、そういうあれか、これかへの考えかたはどこにでも起りがちであった。亀戸託児所が市電の応援をやりすぎて親たちがこわがりはじめた、その時にもやはり、争議応援を全然打切ろうという意見と託児所ぐらい一つ潰したっていいという見解とが対立して、大谷がその席でその両方とも誤っていることを指摘した。

度々の弾圧で東交の職場大衆の中には、このいかかわしいかけ引きの底をわって、自分たちのエネルギーを正しい闘争の道へ引っぱり出すだけの組織者、先頭に立つべき指導者がのこされていない。それが、はたで見ているひろ子にさえ分った。

場内は、立ちこめる煙草のけむりと一緒に益々混乱し、いろんな突拍子もない意見や質問が続出した。

ストは是非やるべしだ。が、今度こそは百パーセント勝つという保証つきでやって貰いたい。

そういうのがあるかと思うと、どういう意味か、わざわざ、

「俺は支部長にききたいんだが」

と、国家社会主義とはどういうものかと質問したものがあつた。ひろ子はそれをきいて、はじめその質問者は、窮極には資本家の利益を国家が権力で守ってやる国家社会主義は、労働者の幸福とどんなに反対のものであるかということについて、誰にでも呑みこめるような説明をひっぱり出そうとして思つたら、それでもなくて、山岸の曖昧な、階級というものの対立する関係の説明をぬいた答弁だけで、反駁さえも加えられずに終つた。そして、

「議長！」

次には、まるで別な話のように、こんな提案がされた。東交はスローガンとしてファツシヨ打倒をかかっているが、俺はそのスローガンに反対だ。東交の規約には、政党、政治に関係なく全従業員の経済的利益を守るとある。それなのに、ファツシヨ打倒なんかというスローガンをあげることは規約を無視している。だから、

「その点がはつきりしねえうちは、俺あもう組合費は出さんつもりだ」

「チャツカリしすぎてるぞ！」

「下田は何だヨ！」

それは、東交内で有名なダラ幹で新聞にさえその御用的立場はすっぱぬかれていた。

「ファツシヨのヤタイ店、ひっこめ！」

「議長！ 議場整理！」

「みなさん、静かに願います。順々に発言して下さい！」

議長は形式的にそう云ったぎり、支部長の山岸はその間ずっと片手をポケットにつつこんだなり、小机の端に頬杖をつき、おきているのか居睡りしているのか、瞼の重い目をつぶつて場内を混乱にまかせている風である。散々ごやごやしぬいて肝心の討論の中心ははぐらかされ、全体の気分がだれて散漫になった時分、議長はさも潮どきという風に色の悪い顔をのび上らせ、

「じゃア、もう時間が来ましたから」

と決議を求めた。柳島車庫は、何処かがストに立ちさえすれば、直ちに罷業に入るという奇妙な決定をしたのであった。

三

事務所の裏口から出て、コークス殻の敷かれた長屋の横丁を歩いて来るうちに、ひろ子

は苦しい、いやな心持がつのつて来た。

それは複雑な心持であった。東交が、全く従業員の高揚を引止める役にしか立っていない。それなのに、自分はいまぐ幹部に扱われて実質的な激励の役にも立たない前座で、応援のことを話させられてしまった。その失敗が今はつきりと感じられた。ひろ子が情勢をよく見ぬいて自分の話をあとに押えておくだけの才覚があつたら、全体の気分があんなにだれた時、少しは引緊める刺戟にもなつたかもしれない。山岸ははじめつからそれを見越して行動した。大谷が来ないと云つたとき、山岸は笑つておだてるようなことを云つた。それも、ひろ子の顔を屈辱で赧あからめさせた。山岸がひろ子を後で喋らせなかつたのは、すれきつた彼の政治的な技術なのであつた。

広い改正道路へ出る手前に新しく架けられたコンクリートの橋があつた。片側通行止で、まだ工事につかつたセメント樽、棒材、赤いガラスをはめこんだ通行止の角燈などがかためて置いてある。人が通れる日向ひなたの歩道の上で、茶色ジャケツにゴム長をはいた七つばかりの男の児と緋の筒つぽに、やっぱりゴム長をはいたがぐり頭と同じ年頃の男の児とが、独楽こまをまわして遊んでいる。二つの小さい鉄独楽が陽に光りながら盛に廻っているぐるりめぐるり、繩をもつた二人の男の児は、シツ、シツ、唾を飛ばしながら力一杯に繩をふ

り、自分の独楽に勢をつけ、横を何が通ろうが傍目もふらない。その様子を見るとひろ子はなおさら、今出て来た会合と自分に腹が立った。

歩調をゆるめて腕時計を見、ひろ子は一層おそく歩きながらハンドバッグをあけて、中仕切を調べた。一週間ばかり前に裁判所へ行つて貰つておいた接見許可証は、四つに畳んだ端がささくれたようになって入っている。十銭、五銭とりませの財布の口をしめ、ひろ子はもう一遍首をかしげるような恰好をしたが、時計を見直すと、今度は地味な黒靴をはつきりとした急ぎ足になつて停留場に向つた。

重吉が市ヶ谷の未決に廻されたのは、半年程前のことであつた。警察には十カ月以上置かれた。はじめ半年ばかりの間は、ひろ子まで警察に留められていたのもとより会えず、ひろ子がかえつてからも、重吉への面会は許可されなかつた。重吉が未決にまわつたことがその日の夕刊でわかつて、裁判所へ初めて許可を貰いに行つた時、ひろ子は予審判事にこう云われた。

「警察では自分の姓名さえも認めておらんのだから、深川重吉という人物は謂わばいるかないか分らんようなものだ。然しマア、いろいろの証拠によつて、こちらには分つていることだから許可します」

重吉は白紙で送られているのであった。

終点から引返しになるその電車は空いていた。日の当る側の座席を選んで四角な大きい白木綿の風呂敷包をわきにおいて腰かけ、それに脇をかけながら長くのばした小指の爪で耳垢をほじったりしているモジリの爺さんのほか、乗客はまばらである。前部のドアの横に楽な姿勢でよっかかっている年輩の車掌が、手帖を出し、短くなつた鉛筆の芯しんを時々舐なめながら何か思案している。市電の古い連中では株をやっているものが少くなかつた。肩からカバンを下げていても、そうやって自分ひとりの世界の中に閉じこもっているその老車掌の自分中心にかたまつた顔つきを見ると、ひろ子の心には重吉からはじめて来た手紙の一節が無限の意味をふくんで甦甦つた。重吉は、なかで注意して行っている健康法をしらせ、さて、外でも変つたことがあるだろう。歴史の齒車はその微細な音響をここには伝えないが、この点に関しては、何等の懸念もない。そう云つてよこした。何等の懸念もない。——だが、ひろ子はその不自由に表現されている言葉の内容を狭く自分の身にだけ引き当てて、自負する気にはとてもなれなかつた。かりに自分の身にだけひき当てて解釈したとして、どうして「何の懸念もない」自分であろう。応援の挨拶一つ、正しい機会をつかんで喋れないのに。そういう未熟さがあつちにもこつちにもあるのに。

上野を大分過ぎたころ気がついて車内を見わたすと、いつの間にか、乗客の身なりから顔の色艶、骨相までが最初柳島で乗った人々とは違つて来ているのに、ひろ子は新しく目を睜みはつた。大東京の東から西へ貫いて、ひろ子は揺すぶられて行っているのだが、同じ電車が山の手に近づくにつれて、乗り降りする男女の姿態は、煤煙の毒で青い樹さえ生えない城東の住民とはちがう柔軟さ、手ぎれいさ、なめらかさで包まれているのであった。

ひろ子は、新宿一丁目で電車を降りた。そして、差入屋の縦看板の並んだ、狭苦しい通りに出た。行手の正面に、異様に空が広く見える刑務所の正門があった。門のそとに、コンクリート塀の高さとえんえん蛇々たる長さとを際立たせて、田舎の小駅にでもありそうなベンチがある。そのベンチの上のさしかけ屋根は、下から突風で吹き上げられでもしたように、高く反りかえっている。雨も風もふせぐ役には立たなかつた。

ひろ子はこの道に来て、森として単調な長い長いコンクリート塀の直線と、市中のどこよりもその碧さが濃いように感じられる青空を見上げるにつけ、胸をし締めつけられるようにその不自然な静寂を感じるのであった。

砂利を鳴らしてひろ子が入つて行つた。人の蹠音のよく響くようというためであろう。どこにも、かしこにも砂利がしいてあつた。

内庭に面して別棟に建っている待合室は、男女にわかたれていた。ガラス戸をあけると煉炭の悪臭が気持悪く顔へ来た。割合すいていて、毛糸編の羽織みたいなものを着て、くずれた束髪にセルロイドの鬢びんぐし櫛をさした酌婦上りらしい女が口をだらりとあけて三白眼をしながら懐手で膝を組んでいる。そのほか四五人である。十二時から一時までは面会を休む。あと十五分ばかりで一時という刻限であった。

ひろ子は売店で十銭の菓子と、のりの佃煮を差入れ、待合所の外の日向に佇んでいた。内庭には松などが植えこんである。面会所は左手の奥にあつたが、初めて来た時、ひろ子は勝手がわからずそこが便所かと思つて行きかけた。そういう間違ひも不思議でないような見かけであつた。門扉の外でタイヤが砂利を撥はじきとばす音がすると、守衛が特別な鍵で門をあけ、そこから自動車が一台内庭へ入つて来た。三四人の男がその車から下りて、敬礼を受けつつ別棟の建物の中に入つて行つた。はなれたところからその様子を眺めていて、ひろ子は、重吉がここへ来たとき玄関の石段を登るに、拷問ではれた脚の自由がきかないで手についてあがつたと人からきいた話を思い出した。

気になつて時計を見たが、まだ五分も経つていない。待つ間はこんなに永いが、いぎ顔を見て口を利く時になると、幾言もまだ話したと思えないのに、もういい、と窓をおろさ

れる。期待の永さと、短い間にひどく緊張して気をはりつめるせいで面会はくたびれた。面会窓があいた瞬間に、やあ、と笑顔になりながら大きい両肩をゆっくり揉み出すようにのり出してくる重吉の身ぶりや、いつも落ちかかつて来る窓ぶたに語尾を押し截きられるように、じゃ元気で、という重吉の声の抑揚は忘れなかった。次に会うまでに一カ月の時がたつていても、最後に見た重吉の眼の中や、唇のあたりに浮んでいた細かい表情はそのままの暖かさで、ひろ子の心にのこっているのであった。

ひろ子はハンドバッグをあけて、ひびの入った小さい鏡をのぞきこんだ。そしてハンケチで鏡のごみをふき、ハンケチの別なところを出して堅く丸め、頬っぺたの上をきつくこすった。皮膚のいくらか荒れた頬に少し赤味がさした。

待合所の壁にとりつけられている拡声機に、ようやくスイッチが入って鳴り出した。ガラス戸をあけて覗くと、雑音が混って聞きとり難い呼声を間違ひなく聴こうとして、女連は今までよりなお深く襟巻に顎をうずめ、袂をかき合せている。

「エー、お待たせしました。……エー、二十八番、二十八番は六号へ。六号。エーそれから三十番」

その声につれて思想関係らしい四十ばかりの細君風の女が、薄べりを敷いた床しょうぎ几から

立ち上り、シヨールへ片手をかけ、黒いラツパを頼りなげに下から振り仰いだ。

「エー、三十番——あなたの面会しようとする人は他の刑務所に送られました」

ザザ鳴る雑音に遮られ、他の刑務所というのが、サの刑務所と云われたようにひろ子の耳にも聞えた。おとなしい細君風の女は、思わず一足のり出して、

「え？」

と、黒い拡声機に向つて女らしく首をかしげてききかえた。が、スイッチはそれきりプツと音を立てて切れ、その女のひとは何とも云えない、困惑の身ぶりで、ちようど恰度旧劇の女形が途方にくれたときのしぐさにやるあのとおりの片足をひいた裾さばきでひろ子の方を見た。

ひろ子は同情に堪えない気がした。

「どこかよその刑務所へいらしたつていうらしかったわ。事務所へ行つてきいて御覧なさい、あすこから入つていらしつて」

ペンキで塗られた二階建の玄関口を指さした。

一時間以上待つて、ひろ子はやっと二三分重吉と話すことが出来た。

ひろ子は、痛い程柵の横木へ自分の胸を押しつけ、重吉の体の工合をきき、中風で寝た

つきりの重吉の父の様子を話すと、いつも註文の本が入らないで本当にすみませんと云つた。託児所の逼迫ひっぱくした自主的やりくりの生活の中で、ひろ子は本を借りに歩く交通費さえないことがあつた。少し金があるときは時間の余裕がなく、両方そろつた時をのがさず、重吉の最低限の必要のまた何分の一かを満たす差入れをするのであつた。いやがらずに本を貸してくれる人は概してひろ子の欲しい種類の本を持っていなかった。持っていそうな人々は、本を人に貸すことを一般的にきらつた。そういうところに重吉が察する以上の不便があるのであつた。

重吉は、突然面会につれ出され、立つたまんまで宙で、一時にいろいろ思い出さなければならぬので、工合わるげに眉を動かしたり、足を踏みかえたりしながら本の名をあげ、「しかし、ひろ子の都合もあるだろうから、あんまり無理はしないでいいよ。よしんば本の読めない時があつても我々はいろいろ有益なことを考えているしね」と云つた。

これは、特に告げるのだがという心持をこめて、ひろ子はゆっくりと、「私、けさは柳島へまわつて来たんで、こんな時間になつてしまった……。託児所の仕事

がひろがつて来ていて、大人のことにまでのびているもんだから——御無沙汰も、わたし

が怠けていたからじゃなかったのよ。電車の父さんたちだって負けちゃ仕様がないでしょう？ だからね」

そう云つて、眼で笑つた。

「ふーん」

重吉は、もう窓ぶたをしめる構えでそれを引っぱる紐に手をかけている看守の方を一瞥し、その視線を真直ひろ子の顔の上に移し、兵児帯へこおびをグツと下げるような力のこもった体のこなしで云つた。

「もし、ひろ子が『病氣』にでもなつた時、急にこまらないように、出来たら少し金をいれておいてくれ」

重吉のそういう言葉を、ひろ子は突嗟に自分たちの生活で理解できる限りの豊富な内容で理解した。重吉は本当は金のことを、云つたのではなかった。ひろ子の託児所もまきこまれている市電の闘争では、また自分たちが会えなくなる時が来るかも知れない。そのことを重吉は諒解し、諒解しているということまでひろ子をはげましいたわつてくれたのであつた。冷たい共同便所に似た面会所から出て、日のよく当たっている門へ向つて帰りかけながら、ひろ子は自分も矢張面会を終つてかえるほかの女のひとたちと同じような足つきで砂利の

上を歩いている、そう思った。会えて嬉しい、そんな一言では云いつくきれないものがひろ子の体の裡にのこされてある。

門を出るとすぐその広い砂利のところに、チャンチャンコを着せられた小猿が一匹来ていた。その小猿をぐるりと囲んで背広の男が二三人とピストルを吊下げた守衛もまじって、立ったり、しゃがんだりして笑っている。猿まわしの背中につかまっている猿ともちがう、どこかのその小猿は、黒い耳を茶色のホヤホヤ毛の頭の両方につき立て、蒼ずんだ尻尾を日向の砂利の上にひきずってしゃがみながら、皺だらけの顔を上下にうごかし、せわしなく目玉をうごかし、こせこせ何か食っている。

「こうしているとところを見るとなかなか可愛いもんだね、ハハハハ」

それは貧相ないやしげな猿であった。人間に向ってピストルを下げている人は猿になら気やすく愛想を云って笑っていた。ここには、人間についてすべての愛嬌を禁止した規則があった。けれども、猿となら笑っても反則ではなかったから。――

四

数日経ったある午後のことであつた。赤坊二人が二階で昼寝している。その間にと、ひろ子が上り端でおしめを畳んでいると、スカートへ下駄をつっかけたタミノが遠くからそれとわかる足音を立てながら外から戻つて来た。土管屋と共同ポンプのわきまで来ると、「ちよつと、どうしたのさアあの看板、ひっくり返つてるじゃないの」と大きな声を出した。庭先に遊んでいた二郎が、

「飯田さん、なんなの？　ネ、何んだつてば、なんのカンバンが、しっくりかえつたのかい」

五つの袖子や秀子、よちよち歩きの源までタミノのまわりにたかつた。

「橋のわきに、白い三角のものが立つてたろう？　あれが溝へおっこちてるのよ」

子供たちぐるみ上り端の前に立つた。ひろ子は、怪訝けげんそうに、

「だつて——あれそんなはじつこに立ててありやしなかつたじゃないの」

と云いながら、自分も土間へおりた。蛇窪無産者託児所と白地へ黒ペンキで書いた標識は、土管の積かきねてある側、溝からは一間以上も引こんだ場所に、通行人の注意をひくように往来へ向つて立ててあつたはずである。

「ホラ！——ね？　誰がやつたんだろう、こんなわるさ」

なるほど、枯草の生えた泥溝の中へ、頭を突こむような恰好で標識がぶちこまれている。

「今朝は何ともなっていないかったわねえ」

「うん、出がけには気がつかなかったわ」

板橋の上へ並んで子供らは驚きを顔に現し目を大きくして見ていたが、タミノに手をひかれていた袖子がいきなり、オカツパをふり上げて叫んだ。

「ね、あれ、うちの父ちゃんがこしらえたんだね」

「そうよ。わるい奴、ねエ」

ひろ子は、土管の側からそろそろと片脚をおろし、枯草の根つ株を足がかりに、腰を出るだけ低くして手をのぼして見た。そうしても、鯪^{しやちほこだ}銚立ちをしている標識までは、なお二尺ばかり距離があった。

「ちよつと！ あなたまでおっこつちや、やだよ」

「大丈夫」

その時道路のむこう側に洗濯屋の若い者が来て自転車をとめ、女と子供ばかりでがやついている様子を珍しげに眺めていた。

「——そりや、綱でもなけりや無理でしょう」

手の泥をはたき落しながら、ひろ子も断念して、

「袖ちゃんのお父さんが来たら上げて貰おう、ね」

皆で引かえす道で、二郎がしつこく訊いた。

「ね、だれがやったの？ どうしてあんなにすてんだろ」

腹を立てていたタミノは、赤い頬つぺたを四角いようにして、袖子の手をひっぱって大股に歩きながら、

「きつと、藤井のごろつきの仕業だ。——ぐるんなってやがるんだもの、何をするかしたもんじやない」

酔っぱらいなどの気まぐれな所業でないことは、明らかであった。

「ポンプのことだって、スパイの奴がたきつけてるにきまつてるんだもの」

おとといの朝、臨時に託児所を手伝いに来ている女子大出の小倉とき子が、井戸端でおしめの洗濯をしていた。水を流す音がしたと思うと、土管屋の台所口のガラス戸が開いた。すると、主人の政助が顔を出し、

「あんまり方図なくつかわれちゃこまりますよ。井戸をつかうのは、そっち一軒じゃねえんだからね、勝手に自分の方でばっかりつかわれちゃ、こっちじゃ、ゆっくりおまんまを

とぐひまもありやしねえ」

と云っている声がした。

「どうもすみません」

洗い上げたおしめをもつて物干竿へまわる時、とき子は四畳半にいたひろ子と窓越しに顔を見合わせ、荒々しい扱いに不馴れなものの、訴える表情を浮べて笑った。ひろ子にはとき子の心の状態がよくわかり、却つて、何も云わなかった。

ひろ子は考えにとらわれた顔つきで、先へ家へ上った。

「さて、と。御苦労様、どうだった？」

タミノは、とんび足に坐ったスカートの中のポケットからハトロン紙の小袋を出し、一つ一つふるって白銅三枚と銅貨を十一二枚置へあけた。

「依田の小母さん、二度目なんでねえつて、渋つてた。これつきりか！」

市電争議の基金を託児所でもあつめるために袋がまわしてあつた。

「直接のことじゃないから、何てつたつてちがうねえ。本当に勝つかどうか分りもしないのに、弾圧くうだけ馬鹿らしいつていうところもあるらしいね」

市電の従業員の中には、労農救援会の班がいくつか出来ていた。蛇窪が赤坊寝台を買う

必要に迫られた時、柳島では班が中心になってその基金を集めた。その金で今ある三つの籐の寝台が備えつけられたのであった。藤田工業、井上製^{せいじゆう}鞆、鍾^{しゅうき}馱^たタビ、向上印刷などへ出ているこの父さん母さん連は、そういうことから市電の連中と結ばれた。隣り同士の義理堅さというようなところもあつて、一回の基金募集の時は三円近く集った。然し、お母さん連は、自分達が出ているそれぞれの職場で市電従業員のために基金を集めるといふような活動をするには概して進まず、綱やお花さんが、消費組合の即売会に誘つて行つた同じ長屋の神さんから、二十銭足らずあつめただけであつた。

ひろ子は、自分たちの託児所でのそういう経験を、数カ月前から持たれるようになっていたフラクシヨンの会合で話した。その日は亀戸での話もされた。亀戸では応援活動のために特別な父母の会が催された。そして、特別に若い人が来て、それぞれの職場はちがつても、労働者であるということから共通に守られなければならない労働者としての連帯ということについて熱心に説明した。親たちは、はじめから終りまで傾聴し、その場で相当な額の基金が集った。ところが程なく意外な結果があらわれた。一人、二人と子供が減りはじめ店頭長屋から五人の子がその託児所へ来なくなつた。

「何から何まで一どきに話しすぎたのがわるかつたんです」

睫毛の長いその保姆が全体的な批判として云った。

「やっとききだしたところによるとこうなんです。話があんまり尤もで、もし争議へまきこまれたらとても断りきれない。もしそうなたら自分のクビが心配だから、今のうちに子供をひっこめちやおうということになったらしいんです」

「なるほどね」

大谷は、一度ふーんと呻^{うな}って、笑った。

「話が尤もでことわり切れまい、か。ふーん。それで、何かね、もうそれつきり本当に子供はよこさないんだろうか」

「ええ。今のところ来ないんです」

蛇窪でも、沢崎キンが警察へつれてゆかれてから、二人、三人、子供をよこさなくなつた親たちがあつた。一人は井上製鞆へ出ていた。そのおかみさんの云い分はこうであつた。「そりやこんな暮しをしていたって、つき合いつてもものはありますからね、たまにやちよいとしたうちへだつて行かなけりやなんないやね。そんな時、行坊をつれてくつと、お前さん、人前つてもものもあるのにあの子つたら大きな声して『おっかちゃん、ここんちブルジョアだね、だからてきだね』って、こう来るんだからね。あたしやまつたく、赤面し

ちやうのさ」

そんな話のあつたのも近頃のことではなかった。ここが、あっちこっちにあつた無産者託児所として、統一された活動に入ったばかりの頃、現れた偏向なのであつた。

赤坊のぐずつく声をききつけてひろ子が二階へあがつて行つた。

お花さんのちい坊が、十カ月近くたつのに一向発育のよくない小さい顔をしかめて、寝苦しうに半泣きの声をしぼって頭をふっている。ひろ子はおしめを代えた。消化不良の便が出ていた。母乳のほか山羊の乳をのませると医者に言われて、お花さんは自分の稼ぎのつづく日にはそれを飲まし、ここへあずけて「よいとまけ」に出ているのであつた。

タア坊のおしめを代えてやっていると、窓の下で、

「いいかい、ここ、あたい達のコーバー！」

甲高い、勝気そうな袖子の声がした。ひろ子がちい坊の寝台を二階の手すり間ぢかまで引っぱり出して日光浴をさせながら見下していると、入口の前の空地の隅に、こわれたブランコがある、その切れた繩の先を握つて袖子が何かを手繰たぐるような手つきでそれをふっている。二郎が、茶の毛糸と青毛糸とをいかにも間に合わせに継いで寸法をのばしたジャケツを着、ゴム長をふんばつて、わきからそれを眺めている。

やや暫く二郎はそうやって眺め、袖子は、目をつつきそうに伸びすぎて 剽悍ひょうかんに見える黒いオカツパの下から、時々真面目くきつた視線で二郎の方を見ながら、運動をつづけているのであったが、やがて二郎が、ぶつきら棒に、

「ヤーイ、名なしの工場なんて、ないや」

と云った。袖子は睨むように二郎を見た。そして思案していたが、やがて動かしている手はとめず、

「——ブランコ工場だヨ！」

イーというように返事している。

見下していたひろ子は、声は立てずに大きな口をあけて笑った。

「ここ、キカイだよ！」

矢張り生真面目な顔で、袖子は、ブランコの柱のひびわれた木目を、あいている左手の指先で押しつけるようにして二郎に示している。

今度は二郎が黙って袖子と並んで立った。そして自分でも、もう一本の切れた繩の端を握り、袖子よりもずつと荒ぼく、調子をつけて振っている。振っていると思うと、二郎はいかにも男の兎らしい敏捷さで、ひよいとゆれているその繩の先へぶら下って、脚をちぢ

こめた。止りそうになるとゴム長で地べたを蹴り、またぶらん、ぶらん振り直す。盲滅法に地べたを蹴ろうとする二郎の足は、やっと地べたに届いたり、そうかと思うとたった二分ぐらいのところを宙を掠^{かす}めてしまったり。――

ひろ子は、いつかつりこまれ、さながら二郎の背中を押ししてでもやっているように、調子をあわせ無意識のうちに自分まで顎を動かした。

袖子は、縄を持ちかえたが、そのまま目を凝して二郎のやることを観察している。

それに飽きると二郎は暫くどこへか姿をかくし、出て来たところを見ると、羽目板のはずれたのを、片ペら泥だらけのまんまひきずって来た。それを、ブランコの切れた縄の下まで引っぱって行き、縄へくくりつけた、つまりブランコらしいものにしてしまっているのだが、縄は太いし、板は薄くて幅がひろいし、霜やけの出来た小さい二郎の手にはしまつがつかない。ぎごちない恰好で膝までつかって何とかしようとして、板を落しても落しても、二郎は声も出さず力みこんで骨を折っている。家でも、託児所でも、玩具らしい玩具を持たない二郎の努力がそこにあるのであった。ひろ子はそれをただ見下してはいられない心持になって来た。タミノはどうしたのだろう。そう思いながら下りて来て、ひろ子はおやと思った。白井がいつの間にか来ている。そしてあっち向きに、タミノと向いあつて柱に

よりかかっていた。ひろ子の蹠音で、タミノが顔をあげると、白井はこっちは振りかえらないまま、いそがず、しかし十分ひろ子を意識した素ぶりでは何か前にあったものを畳んで紺緋の内懐へしまった。

ひろ子は二人のいる四畳半の方へ行こうとしたのをやめた。そしてありあわせの下駄をはいて外へ出た。

五

夜みんな子供をかえして静かになると、タミノとひろ子とは、工夫してなるだけ人目をひくように、字の大小、ふちどりなどに心を配りながら、大きいのが小さい四角い伝単^{でんたん}形^{がた}やらのガリ版をきった。

託児所の経済は、市電応援以来非常にわるくなつた。ひろ子らは、これまでのように、定つて毎日来る子供ばかりを預るだけでなく、急用で出かける母親にも便宜なように、どんな臨時でもおやつ代だけで預ること、そして託児所の仕事をもっと大衆化することを決定した。同時に従来も労救とは別に託児所としての維持員を一般の進歩的な家庭の婦人の

間に持っていた、その方面も拡大しよう。原紙を切っても、手許に謄写版がなかった。診療所まで出かけて行つて刷らなければならなかった。翌日タミノが、例によつてスカートに下駄ばきで出かけようとしているところへ、白井がやつて来て、

「どれ？」

タミノの手から原紙の円く捲いたのをうけとつて見て、かえし、

「あつち、多分今つかつているでしょう」

各部署の活動に通曉したように云つたりした。

「あら！ やんなつちやうね。よつて来たの？」

白井はそれには答えず、

「そんなものくらいだったら、僕の知つているところのでやれると思うんだが——」

「なーんだ、そんなことがあるんなら早くそう云つてくれればいいのに！ そこへ行こう、

ね、いいんでしよう？」

「今夜あたりは、大抵いいだろうと思うんだが……」

正直で単純なタミノに向う白井のそういう話しぶりや、ひろ子がこの間二階から何心なく降りて来て目にした白井の凄^{すこ}んだような態度などには何かわざとらしいものが流れてい

るのであった。白井と二人で出かけて行って、タミノは謄写版刷りの仕事もちやんとして来たが、その四五日あとになって、ふと何かのはずみで云った。

「ポートルアップって、私、洋酒だとばかり思ってたら——ちがうんだね」

或る晩のことであつた。タミノが電燈を低く下げて靴下の穴つくろいをしながら、
「私、いまにここかわるようになるかもしれない」

独言のように云つた。それは風のひどい晩で、ひろ子も同じ電燈の下へ机を出して会計簿を調べていた。顔もあげず数字をかきつづけながら、ひろ子はごく自然な気持で、

「ふーん」

とタミノの言葉をうけた。

「どこか、うまいところがありそうなの？」

タミノは三月ばかり前、山電気を組合関係で馘首になるまで、ずっと工場生活をして来ていた。組合の書記局へおいでよつて云われたけど、私、職場の方が好きだ。また入りこむよ、そう云つて、一時ここを手伝つていたのであつた。

下を向いて、こんぐらかつた糸を不器用に、若々しい粗暴さで引っぱりながらタミノは、

「まだはつきりしないんだけどね」

間をおいて、

「白井さん、待ってたのがやつとついたって、とてもよろこんでる……」

ひろ子は思わず首を擡げ、下を向いているタミノを見ながら、ペンをもっていない方の指で自分の下唇をゆるゆると振るような手つきをした。タミノはやっぱり顔をつくろいものの上につつむけたままにいる。

「——つくつて……」

様々のありふれた推測が、ひろ子の胸に浮んだ。いずれにせよ、白井と党の組織との連絡がついた、ということにはちがいない。

「だって、そのことと、あんたが、ここからわかるってことは、別なんでしょう？」

タミノは直接それには返事をせず、自分自身の考えに半分とりこまれているような調子で、暫く経って呟いた。

「なかなか役に立つ女が少なくて、みんな困ってるらしいわねえ」

その言葉でひろ子には全部を語らないタミノの考えの道筋が、まざまざ照らし出されたように思った。

「こんどのところは——職場じゃないの？」

「……………」

ひろ子は、若い、正直なタミノに向つて、こみ入つた自分の愛情が^{ほとぼし}迸るのを感じた。タミノは、おそらく白井に何か云われて、彼女には職場での活動よりもっと積極的なねうちを持つているように考えられる或る役割を引きうける気になっていのではないだろうか。ひろ子としては、若い女の活動家が多くの場合便宜的に引きこまれる家政婦や秘書という役割については久しい前からいろいろの疑問を抱いていたのであつた。ひろ子は、なお下唇を振るような手つきをして考えていたが、ゆっくりと云つた。

「あつちじや、女の同志をハウスキーパーだの秘書だのという名目で同棲させて、性的交渉まで持つたりするようなのはよくないとされていゝらしいわね。——何かで読んだんだけれど」

ひろ子たちの仲間で「あつち」というときは、いつもソヴェト同盟という意味なのであつた。

「ふーん」

今度はタミノが顔をあげた。眉根をキと持上げるような眼でひろ子を見て、何か云いか

けたが、そのまま黙つて針を動かさつづけた。

やがて、靴下つくりを終つて、タミノは、維持員名簿をめくりながらハトロン封筒へ宛名を書きはじめた。

夜が更けて、風が当たると庇ひさしのトタンがガワガワ鳴つた。その木枯しが落ちると、道の凍いてるのがわかるような四辺の静けさである。タミノが万年筆の先を妙に曲げて持つて字を書いている。減つたペンと滑つこい紙の面とが軋きしみあつて、キュ、キュと音をたてている。

そのキュ、キュいう音を聴きながら自分も仕事をつづけているうちに、ひろ子の心は一つの情景に誘われた。六畳、四畳半、そういう家には遠山に松の絵を描いたやすもの唐紙がたつている。そのこっちのチャブ台で、ひろ子が、物を書いていた。もう暁方に近かつた。ひろ子がくたびれて、考えもまとまらずにあぐねていると、その唐紙のあつちから、丁度今きこえているようなキュキュというペンの音がした。唐紙のこっちからでも、書かれてゆく字のむらのない速力や、渋滞せず流れつづける考えの精力的な勢やを感じさせずに置かない音であつた。ひろ子は、自分の手をとめたなり、心たのしくその音に耳を傾けていた。それから、唐紙ごしに、

「ちよつと」

重吉に声をかけた。

「——何だい？」

「……デモらないで下さいね」

ひとり口元をほころばせ、様子をうかがっていると、重吉は、突嗟にひろ子の云った言葉の意味がわからなかつたらしく、唐紙のむこうで、居ずまいを直す氣勢であつたが、程なく、

「——なアんだ！」

笑い出した。

「そんな柄でもないだろう」

じきにまた、キユキユ音がはじめた。——

ひろ子には、タミノがこれから経てゆくであろう一つの階級的な立場をもった女としての一生が、自分の経験するよろこび、苦しみの一つ一つと、情熱的に結び合わされたものとして感じられるのであつた。

重吉が検挙されてひろ子も別の警察にとめられていた時のことであつた。ひろ子は二階の特高室の窓から雀の母親が警察の構内に生えている檜ひば葉の梢に巢をかけているのを見つ

けた。

ひろ子は覚えず、

「マア、可哀想に！　こんなところに巢なんかかけて」

と云った。するとそこにいあわせた髭の濃い男が、

「なに可哀想なもんか！　安全に保護されることを知ってるんだよ」

そう云つて、ジロジロひろ子を上へ下へ見ていたが、

「君なんでも子供を一人生みやいいんだ。さぞ可愛がるだろうな、目に見えるようだ」

ひろ子は、その男の正面に視線を据えて、

「深川をかえして下さい」

そう云った。男は黙りこんだ。

ひろ子がそこから帰つて、託児所へ住むようになったばかりの夏の末、お花さんの友達が現場で大怪我をして病院にかつぎこまれたことがあった。

ちい坊を託児所にあずかつて、下の四畳半へねかしたまま、団扇うちわで蚊を追い追ひ、ひろ子はそのわきで本を読んでいた。やがて眼をさましたちい坊は、泣き出してどうしてもだまらない。鼻のあたまに汗をかいて泣きしきるので、ひろ子はああと思いつき、その思い

つきに自分で嬉しがりながら、

「さア、これでどう？　ちい公もこれじゃ泣けまい？」

そう云いながら白いブラウスの胸をひろげて、ひろ子は自分の乳房を泣いている赤坊の口元にさしつけた。ちい公は、その時分からしなびて、顔色や足の裏の血色がわるい児であつたが、ほそい赤い輪のように口をひろげ、さぐりついてやっとひろ子の乳首をふくんだかと思うと、すぐ舌でその乳首を口の中から押し出して前より一層激しく泣きたてた。三度も四度もひろ子はそれをくりかえした揚句、到頭あきらめて自分も困ってききわけのある子に云うように挨拶した。

「いやじゃあこまつたことね。——でも小母ちゃんがわるいんじゃないのよ、ちい坊や」
それから一時間あまり経つて北海道生れのお花さんが、帰つて来た。

「すみませんでしたね。ふー、たまんね。何んとした暑さだろう」

お花さんは立つたまま帯をほどき、大柄な浴衣ゆかたをぬぎすて、腰巻一つになつた肩へしぼつて来た手拭をかけ、

「ホーラよ、泣きみそ坊主！」

長く垂れ下つて黒い乳首をあてがった。鼻息を立ててちい公はそれへかぶりついた。ひ

ろ子さえほつとする安堵の色が赤坊の顔にあらわれた。

ひろ子はその様子をわきからのぞきこみながら、さっきの話をした。お花さんは、無頓着に生えぎわの汗を肩へかけた手拭でふきながら、

「そりや吸わないわね、だって、のましてる乳でなけりや、ひやつこいもん、いやがるよ
ウ」

ひろ子にはその夜のことが忘れなかった。この自分の乳首が子供を生んだことのない女のつめたい乳首であるということ。そして、見た目は見事な体のお花さんが、栄養不良でおむつから出る二つの小さい足の裏が蒼白いような赤子を、暖みだけはある乳房に辛くも吸いつけている姿。この社会での女の悲しみと憤りの二つの絵がそこにあるように、ひろ子の心に印されたのであった。

その晩、床に入って電燈を消してから、ひろ子は、さり気ない穏やかな調子でタミノに云った。

「ねえ、あなたの将来のあるいいところや積極性を、個人的なあいまいなゆきがかかりで下らなくつかってしまわないようにしなさいね」

「……………」

「おせっかいみたいでわるいけど、私たちは仕事をやってみて、その実際にひとを見合わせるしかないんだもの……ねえ。そうでしょう？ 白井さんとあなたはまだ仕事らしい仕事をやって見ていないんだもの——気心のしれない気がする……」

タミノが寢床の中で身じろぎをする気配がした。よつぼどして、タミノは素直な調子で、
「——そう云いやそうだねえ」

ゆつくりそう云って、溜息をつくのがひろ子に聞えた。

六

朝っぱらから所轄の特高が託児所へ来た。何ということなしその辺をうろつき、

「豊野が来るだろう」

と、土間にある履物を穿せんざく鑿的に見た。豊野などという名前を、ひろ子たちは知らなかった。

「何、しらん？ うそつけ、ちゃんと連絡に出ているところを見た者があるんだ」

それは明らかに云いがかりで、そのまま帰りかけたが、

「おい、ありや、何だ!」

ステツキの先で指すのを見ると、それはこの間溝にうちこまれたあと、また立て直されている託児所の標識であった。

「何って——わかりきってるじゃないか」

タミノが出て云った。

「もう一年もあすこに立ってるんだもの」

「立てていいって誰か云ったのか?」

いかにも煩^{うる}さそうに、タミノが、

「だって、立ってるんだもの。ここがこうやってあるんだから——」

と云いかけると、その男はおつかぶせて、

「そりゃ分らんよ」

といやに意味深長に云った。

「こつちで、ない、と見りや、在りやしないじゃないか。日本プロレタリア文化連盟だつて、当人たちはあるつもりらしいが、我々の方じゃ、あらせちやいないんだ」

タミノは、その男が去ると、地べたへ唾を吐きつけて云った。

「チエツ！ すかんならしい！」

その次の日の午後二時頃、ひろ子が二階でニュースの下書きをしていると、誰かが一段、一段と重そうに階子をのぼって来る蹙音がした。きき馴れない足どりであった。ペンを持ったまま振り向くと、そこには鍾馗タビの稲葉のおかみさんが、風呂敷包みを下げたなり上つて来ている。包みからは大根がはみ出していた。

「ああ、小母さんなの……どうして？ 何か用？」

「大谷さん、ここへきなかつた？」

「——来ませんよ」

大谷とは、今夜会う約束なのであった。稲葉のおかみさんは、平常でない目のくばりで、

「じゃア、やっぱしそうだったんだるか」

ひろ子は、自分でも知らない速さで椅子から立ち上った。

「どうした？」

「——あたし、見ちゃったんだヨ」

その声の表情にはひろ子をぞつとさせるものがあつた。

おかみさんの家が講の当番なので、今日は休んで買い出しに出た。駅前の大通りをこっちの方へ曲ると、前の方を大谷らしい男が、もう一人別の若い男と連れ立って歩いて行くのが見えた。稲葉の神さんはもう少し近づいてみて大谷だったら声をかけようと思つてうしろからついてゆくと、ラジオ屋の角で若い方の男が別れた。二つばかり横丁をすぎた時、駄菓子屋の横から一人の洋服の男が出て来たと思つと、早、もう二人どこから出て来て丁度前後から大谷を挟んだ。

「おい！」

何とかいうのと、大谷がすりぬけようとするのと、その大谷をすばやく三人が囲んでちよつとくみ合いがはじまつたのと、稲葉の神さんの目には、すべてが速い、鋭い、音のない雷光のように映つた。むこうへ行かず、駅前の方へ戻るので、お神さんは袂で半分顔をかくして軒下に引こんでいた。その眼に映つたのは左右とうしろからとりかこまれ、手錠をはめられた男の姿であつた。それでも落着いて着物の前を不自由な手先で直しながら来たのは、たしかに大谷だつたというのである。

ひろ子は、聞き終つた時、喉がつまって、変に声が出し難いように感じた。暫く、ペンをもつたままの右手で口を抑えるようにしていたが舌の乾いた声で、訊いた。

「大谷さん、何か持つてませんでしたか？」

「サア、私もあれツと思つちやつたもんで——ちつちやい包みみたいなもの下げたね、たしか」

「先に別れた男つて——どんな装なりしてました？ 洋服？」

「洋服なんぞじゃあるもんか、そら、そこいらによくあるじゃないの、書生さんのさ、かすり 紺あざだつたよ、多分」

ひろ子の瞳孔が、凝じつと刺すように細まった。紺……紺。白井は紺ばかり着ている。

——だが——

「そのひとの顔は見なかったのね」

「だって、あんた、そりや先へ曲つて行つちやつたんだもの……」

一段おきに跨いで、タミノが下から登つて来た。

「きいた？」

赤い頬の上で、タミノは眼をギラギラさせた。

「こつち、来るんじゃない？」

稲葉の神さんは、何かが身近に迫つたのを直感したように、ひろ子の顔からタミノへ、

またひろ子へと不安そうな目をうつした。ひろ子はそれに心づき、

「大丈夫よ！」

タミノに向って目顔した。

「ここは託児所だもの、ねえ、変なことをすりや、おつかさん達だつて黙つちやいやしいわねえ」

汗が出ているというのでもないのに、稲葉のお神さんは縞の前垂を指にからんで頻りに小鼻のまわりをふいた。

「ポロレタリヤは、しとじやないとも思つてけつかるのかしら！」

稲葉のお神さんが下へおりて行くと、待ちかねたようにタミノが力のある腕を動かして戸棚から行李を引きずり出した。そして、いらぬ紙きれを注意ぶかく始末しながらタミノは、

「ここまで総ざらいなんての、御免だね」と呟いた。

それは分らなかつた。ソヴェトの友の会が各地区の職場へ拡がって、ソヴェト見学団の選出が職場でされるようになったら、その活動は却つて不自由にされた。市電応援の活動

と大谷の部署の関係とから、託児所へまで余波が来ることを全く予想していないことではなかった。或るところへ電話をかけ、そこから必要な場所へ知らして貰うため、タミノを出した。

重吉がやられた時、ひろ子は自分では十分落着いているつもりであったが、大谷の家の降りなれた階子の中途に下っている壁の横木へ、二度もひどく自分のおでこをぶつけた。その薄い傷あとを黙って見ていた大谷の眼差し。それから、

「まあ、飯をたべて行きなさい」

と、チャブ台へ自然とひろ子を坐らした大谷のもの馴れた思いやりのこもった沈着さ。仕事で彼によつて成長させられた色々の場面を考えると、ひろ子は、遂に彼のつかまつたくちおしきで腹が震える感じであった。

いつだったか、ひろ子は大谷がもう少しであぶなかつたところを、樹へのぼって助かつたという話を誰かからきいた。ひろ子が面白がつてその噂を重吉に喋り、

「ほんとにそんなことがあつたの？」

と訊いた。重吉は、ひろ子の顔を一寸見ていたが、直接そのことがあつたともなかつたとも云わず、ただ、

「なかなか早業をやるよ」

そう答えて、愉快そうに笑った。ひろ子は、後々まで、そのときの重吉の返事のしづりを思いかえして、心に刻みつけられるものを感じた。重吉と大谷とのつきあいの深さは、互の噂を個人的に喋り散らす以上のものであり、そういう友情が歴史を押しすすめるための大事な見えないバネとなっている、その値うちがひろ子にも近頃少しずつ分つて来ているのであった。

だが、果して大谷はやらなければならないか。ひろ子はそう考えると、大谷のやりかたにも口惜しいところがあるように思えた。例えば緋の男ときいてひろ子の頭に浮ぶのは白井という人物である。もしそれが、稲葉のかみさんのみたあの緋であったとしたら。ひろ子が言葉は少くしかし意味は深く漠然とした疑いを話したとき大谷は、比較的あっさり、ひろ子の不安を否定した。だが大谷は絶対にそのようなことがあり得ないという確信を持つ客観的な根拠があったのだろうか。

この前後のいきさつには、ひろ子として何か口惜しいところがある。

僅か一日おいて、託児所からタミノがやられた。

ひろ子が子供らの駆虫剤をもらいに診療所へ行つてかえつて来たら、溝橋のところに二

郎と袖子がこつちを見て立っていた。遠くでひろ子の姿を見つけると、二人の子供は手を繋つなぎあわせ、駆けられるだけの力で走つて来た。子供らの様子を見た刹那、ひろ子は、何故か、火事！ と錯覚した。こちらからも思わず小走りになった。出逢いがしらのひろ子のスカートへ握りかかつて、二郎が、

「あのね！ あのね！」

息を切り、

「飯田さんがつれてかれちやったよ！」

と告げた。

「いつ！」

「さつき！」

「小倉さんは？」

「いる」

その朝の新聞に、市電争議打ち切りが出た。タミノは、立ったまま新聞をひろげて見ていたが一遍おろしたのをまたとり上げ、

「あたしたちが、こんなことを今朝になつてブル新で知るなんて。——何てくやしいんだ

ろ

と云つた。その直ちよくせつ截な表現は、ひろ子の心持とも云えた。お花さんが、その話をきいて、

「あれ、あたし困つちやつたな、近所せわりいようでき。ストライキするからつてたとい一銭にしろ、袋せ入れてむらつたんだもん……ねえ」

基金を出した親たちに、争議は従業員が実力を出して負けたのでないことを説明したビラを刷る、その仕度をタミノはさつき迄していたはずなのであつた。

小倉は、入つて来るひろ子を見ると、

「ああ、よかつた！」

まるでたぐりよせられるように立つて来た。

二人の特高が、まるで何でもないようにやって来て、ろくに物も云わずいきなり二階へのし上つた。すぐつづいてタミノがついて上り、降りて来たのを見ると、一人の特高が手に赤インクで、「赤旗」と題を刷つたものを持っていた。それでタミノの顔をぶつた。

「しらばつくれんな、貴様党员じゃないか。大谷が皆喋つたぞつて、それはそれはひどくぶたれなすつたわ」

そう云いながら小倉は涙を浮べた。

ひろ子は我知らずきびしい調子で、

「そんなことは、うそだがね」

と云った。ここの託児所に一枚だつてありやうのないやうな文書が口実として、どこかから用意して来てつかわれる。それは、プロレタリア文化連盟の弾圧の場合にもつかわれたたてであることをひろ子はきいていた。

ひろ子は小倉を励ましながら、大きい白い紙に、何の理由もなくもう三カ月近く警察の留置場におかれている沢崎キンのことと更にさつきひつぱられて行ったタミノのことを書いて、入つて来る者の目にすぐつくように、上り端の鴨居かもいに下げた。

自分がこの今の一ときはのがれているその永続性が、夜までつづくか、あしたまでつづくものか、ひろ子には見当がつかなかった。ひろ子はひとりで二階へ上つて見た。三畳のテーブルのまわりが取乱されている。テーブルの下の畳へ、ペン軸が上から乱暴にころがり落ちたまま突刺さつていた。しずかにそれをぬきとり、ひろ子はそれをいじりながら、夕方子供の迎えに来る親たちで、そのまま会合を持つ方針を立てた。それから下へおりて行つて、小倉に一つの包みを託した。なかみは、獄中の重吉のための一着のジャケツであ

つ
た。
。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「中央公論」

1935（昭和10）年4月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

乳房

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>